

(別紙様式 = 小学校用)

都道府県番号	32
都道府県名	島根県

【
*重点をおいた観点にチェックすること

学校名及び規模

学校名	島根県松江市立乃木小学校								
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	5	5	5	5	5	2	32	48
児童数	174	180	183	171	166	178	7	1059	

研究の概要

(1) 研究主題

『生きる力をもつ子どもの育成をめざして』
- 自らの課題を設定し、主体的に解決していこうとする子をめざして -

(2) 研究主題設定の趣旨

学力は、知識や技能だけでなく、関心・意欲、思考力、表現力、問題を発見し解決する能力などを包括したものと考えた。そして、そのような学力面について本校の子どもの実態をみたとき、与えられた課題に対しては、とても真面目に取り組むが、自分から課題を見つけたり自分の考えを表現したり、友だちと関わりながら話し合ったりすることができにくいという姿がつかび上がってきた。そして、その原因として授業実践において、課題意識をしっかりとらせるような授業の工夫が十分でなかったり、一人一人に応じたきめ細かな支援が足りなかったりしたためではないかと考え、本主題を設定した。

研究の内容

(1) 研究推進体制の工夫

各学年部会、少人数部会（1年部を除く各学年の少人数担当者）、総合的な学習の時間部会（3年～6年の総合的な学習の時間担当者）を設定した。そして、これらの各部会を適宜開き、研究推進委員会と連携をとりながら、教材研究を行ったり、研究内容を検討したりした。

(2) 研究の実際

個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善という観点で、一斉指導、TT、少人数授業、習熟の程度に応じた指導などを、学習のねらいや、児童の実態に応じて、柔軟に取り入れ、その効果を検討している。

「自らの課題を見つけ、解決していく学習」における、TTと少人数授業の組み合わせの工夫

ア TTと、習熟の程度に応じた少人数授業の組み合わせの工夫

第4学年 算数科 「調べ方と整理のしかた」の実践

保健室の「乃木小学校のけがの記録」の資料から一人一人が課題を見つけ、解決していく学習を行った。

《見つけた課題（抜粋）》

- ・何曜日にけがが多いか。
- ・一日のうちいつけがをする人が多いか。
- ・どこでけがをする人が多いか。
- ・どんな場所でどんなけがをする人が多いか。

見つけた課題について、分か

4. 指導計画（全9時間）
関心・意欲・態度 数学的な考え方 表現・処理 知識・理解

小単元	時数	学習内容	形態	評価
第1次課題の設定	1	・自分達がけがをして、保健室でお世話になった経験などについて発表する。 ・「乃木小学校のけがの記録」の資料をもとに乃木小学校のけがについて調べてみようと思う課題を立てる。 ・それぞれの課題を整理する。	A (TT)	自分達のけがについて想起し「乃木小学校のけがの記録」をもとに学校全体のけがについて自分なりの課題を持って調べていこうとする。みんなの立てた課題を、観点別に整理できる。
第3次2つのことからについて調べる	2 本時 1/2	・「2つの観点」で調べようとした課題の中から1つ取り上げ、分かりやすく整理する方法を考える。 ・「2つの観点」の表にまとめる。	A (TT)	「2つの観点」について調べようとする課題について、資料を整理し表にまとめようとする。
		どどんコース じっくりコース	C (習熟度別)	「2つの観点」について分類整理して、簡潔な表に表すことができる。
		・自分なりに表を工夫し話し合いながらより簡潔な表にまとめる。 ・その他の課題での二次元の表作りに挑戦する。		「1つの観点」の表作りで習得したことからを生かし「2つの観点」の表を作ることができる。
		・整理した表を考察し、乃木小学校のけがについて考え、調べようとした課題の解決をする。	A (TT)	表をもとに、乃木小学校のけがの特徴について考え、課題の解決を図ることができる。

りやすく整理する方法を考えたとき、課題解決に向けて、自分の見通しがあるかないかで、「どんどんコース」と「じっくりコース」のどちらかを自己選択する習熟度別の少人数の形態を取り入れた。そして、コースを選択するために本時の課題を確認した後、見つけた課題について、分かりやすく整理する方法を考える時間を約3分間とった。解決の見通しがもてたか、もてないかで「どんどんコース」と「じっくりコース」のどちらかを子どもが自己選択するようにした。

(どんどんコース) 自分の考えで表づくりをした後、それぞれが考えた表を発表し、より分かりやすい表をみんなで見つけていった。

(じっくりコース) 表の作成に具体的な方法が見つからない子どもたちであっても教師が簡単に教えてしまうのではなく、子どもの考えを丁寧にひるいあげながらそれをまとめる形で、整理の仕方を明らかにしていった。

このような取組によって子どもたちは、自分に合った学び方を選択することができ、自分の選んだコースで意欲的に学習する姿がみられた。

< どんどんコースの子どもが作成した表 >

けが調へ(種類 場所)

種類 場所	すきず	打ばく	ねんど	つき指	きりぎりす	合計
ろう下	3	4	1	1	1	10
校庭	5	3	1	0	0	9
教室	2	1	1	0	1	5
体育館	0	0	0	2	1	3
道路	3	0	0	0	0	3
合計	13	8	3	3	3	30

イ T Tと、課題解決の方法及び選択した文章構成別の少人数授業の組合せの工夫

第5学年 国語科 「地球環境について考えよう」の実践

説明文「一秒が一年をこわす」を読み、「ホタルのすむ水辺」や既習の説明文から文章構成の仕方を知り、それを手がかりに自分が調べたことをもとに意見文を書く学習を行った。

自分が見つけた課題についてインターネットや本などで調べていく際、その方法別に教師が分かれて支援したり、意見文の構成別に支援したりする少人数指導の形態をとった。

子どもたちが取り上げた環境問題も4種類あり、文章構成もいろいろあったが、いくつかの情報から必要なものを選んだり順番を考えたりして、意欲的に意見文を書く姿が見られた。

4. 指導計画及び評価計画(全16時間) A: T・T E: 方法別・構成別少人数

小単元	時数	学習内容	形態	評価
(第3次) 環境会議に向けて、意見文(発表原稿)を作り、発表する	4	1 自分の主張点、収集した事例を考え、既習の説明文の構成や、科学作品展のまとめ方から、自分が一番よいと思う構成を選び、構成表を作る (本時12/16)	A	・ 既習の構成例を参考にし、自分の伝えたいことが明確に相手に伝わるような構成表を作ることができたか。
		2 意見文(発表原稿)を作る	E	・ 調べたことの中から、必要な事柄や資料を取捨選択し、整理することができたか。 ・ 事例が各自の考えを裏付けられるものであり、筋道の通った文章構成になっているか。 ・ 構成表を元に、接続語や指示語を効果的に使って文章を構成できたか。

「一人一人が確実に技能を身につけることができるようにする学習」における、習熟の程度に応じた指導の工夫

第2学年 算数科 「たし算とひき算」の実践

T Tによる一斉指導でたし算とひき算の仕方について学習した後、計算技能の習熟の程度に応じて2つのコースを設定し、それぞれのコースごとに学習課題を設定して計算技能の定着を図る指導を行った。プレテストに基づいて子どもが自分でコースを選択するようにし、どちらのコースを選んだらよいか迷っている子どもや、やや無理な選択をした子どもには、教師がコースの変更等の助言を行った。

(じっくりコース) 学習内容のどこでつまづいているのかを、それまでの取組やプレテストの結果を見て把握し、つまづいている箇所について繰り返し指導した。基本的な問題を印刷したプリントを数枚用意し、子どもがそれぞれの進捗で学習を進められるようにした。教員は困っている子どもを中心に支援した。

(どんどんコース) キャラクター入りの問題プリントをたくさん用意し、子どもがそれぞれの進捗で解くことができるようにした。採点コーナーでは、子どもが自分で採点し、合格したら次のプリントに進めるようにした。またヒントコーナーでは、子どもが教師に質問できるようにし、教師は、主としてその子どもの支援にあたった。

「一人一人が考えを表現することができるようにする学習」における，TT指導

第1学年 算数科 「たしざん(2)」の実践

くり上がりのある計算の仕方を自分の方法で表現できるようにするとともに，子どもたちが表現したものを取り上げ，色々な考えがあることを認め，10のかたまりを作って計算することのよさに気づかせたいと考えた。

一人一人に自分の考えがもてるようにするための手立てとして，ブロックを与え具体的に操作しながら計算の方法が考えられるようにした。そして，計算方法を図や言葉で表現する活動を行った。

考えていることが言葉や図でうまく表現できない子どもに，考えを聞いて助言するなどの支援をするためにTTの指導形態をとった。

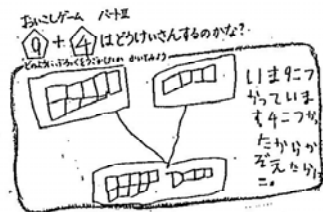
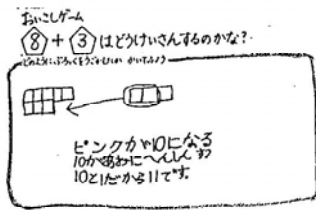
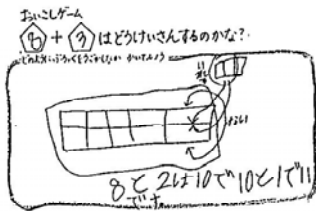
そして，35名中2名を除いた33名の子どもが自分なりの方法で自分の考えを表現することができた。

＜ 本時の学習 ＞

5. 本時の学習(2/11)

- ねらい
- ・おいこしゲームのルールを知り，繰り上がりのあるたしざんの計算の仕方に関心を持ち，進んでブロックを動かすことができる。(関心・意欲・態度)
 - ・図に表すことを通して10のまとまりを作って計算する方法をみつめることができる。(数学的な考え方)

【子どもが表現したもの】



展開	学習活動	支援 評価
過程	おいこしゲームパート をしよう	ゲームのルールを確認し，新たなルールを指示した上，よく分かるようにT1とT2でやってみる。
つか	・パート とどうちがうのかな。 ・さいころの目のかざがおおきいな。	
か	9 + 4 はどうやって計算するのかな	今までの計算では出来ないことに気づいた子どものつぶやきを拾い，課題につなげる。
む	・ブロックを使うと簡単だ。 ・13になった。	
調	計算のやり方をみんなに教えてあげよう	ブロックを用いて課題解決のために意欲的に取り組んでいるか。(観察)
べる	問題を解いてみよう ・かぞえてたしたよ。	自分のやり方をワークシートにどうかいていいのかわからない子どもには声がけをする。
ま	 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13	それぞれのやり方を黒板に書かせ，話し合いながら計算の仕方を見つけていく手がかりにする。
と	・9に1をたして10を作ったよ。	
め		自分なりの方法で問題がとけているか(観察・ワークシート・発言)
る	・9から1をとって5のかたまりを2つ作ったよ。	
		10のまとまりを作るよさに気づいたか(ワークシート・発言・つぶやき)
	・さんと さんの考えは似ているね。 ・さんと さんの是一緒だね。 ・10のお部屋を四角で囲んで書くとかかりやすいね。 ・あんなやり方もあるんだな	10のまとまりを作ってブロックを動かすことができるか。(観察)
	練習してみよう 8 + 3	多様な考えも認めながら加数分解で解くようにする。
	・黒板を見ながらやってみよう。 ・8は何とで10になるかな，ヒントコーナーを見てみよう。	10のまとまりをどうやっていいかわからない子どもには指示物(ヒントコーナー)を示し問題を解く手がかりにする。

(3) 研究の成果と課題
《成果》

一斉指導において自分の課題や解決の方法などをもつことができた子どもは，グループの学習(少人数授業)において友達の様々な考えに触れ，自分の課題などを見直したり，よりよい方法を見つけたりすることができた。解決の方法を持つことができなかつたり不安を感じたりした子どもたちは，もう一つのグループで教師とともに，自分達の考えを基に解決の方法を見つけ，その方法を用いて自分の課題を解決することができた。(事例 ア)

このことから，課題解決の見通しの有無でグループを編成することは，個に応じた課題解決の方法を見つけさせたり，多様な考えに触れさせたりすることができ，ねらいに迫るための有効な指導方法であったと考える。

課題解決の方法別のグループにおいて，それぞれのグループの子ども達は，先生や友達から，調べるとよい場所や関連する内容などの情報を得て，じっくり自分の課題解決に取り組むことができた。(事例 イ)

このことから，課題解決の方法別にグループ編成することにより，指導者が指導の焦点を絞って指導することができ，ねらいに迫るために有効な指導方法であると考える。

単元後半の習熟度別の学習において、十分技能を身に付けていない子どもや自信が持てない子どもは、同じ内容を繰り返し学習することができ、より確かに身に付けることができたり、自信をふくらませたりすることができた。ある程度技能を身に付けている子どもは、自分で練習を進め、技能の習熟度を高めるとともに、満足を得ることができたようである（事例）

このことから、技能の習得をねらいとした学習において、単元後半に習熟度別の指導を行うことは有効であると考える。

学習環境の変化等に影響を受けやすい1年生のT Tによる一斉指導では、自分の考えを絵や言葉で画用紙に書き表すことができない子どもも、先生から助言を受けたり、友達の様子を参考にしたりして、自分が考えていることを絵や図、言葉などを使って画用紙に書き表すことができた。（事例）

このことから、一斉学習の流れの中で、様々な個別の学習状況に対応するためには、T T指導も有効であることが分かった。

《課題》

学習のねらいや児童の実態に応じてT Tによる指導や少人数授業を柔軟に取り入れ、徐々に子どもが課題を見つかったり、自分の考えをしっかりと表現したりすることができるようになってきている。さらに研究を重ね、T Tによる指導が有効な場合や少人数授業が有効な場合、それぞれの留意点などを明らかにしていく必要がある。

自分の考えを友達に分かりやすく説明したり、友達どうし関わり合って課題を解決したりすることができるようにするために、話し合いの指導に関する研究を進めていく必要がある。話し合いの場面において、教師は何について話し合わせるのかを明確にすることや、発問や板書などの在り方について検討する必要がある。

(4) 研究成果の普及の方策

- ・ 近隣の学校や他のフロンティア校へ研究授業を公開し、数名の先生が研究授業に参加された。
- ・ 教育事務所主催の研究主任等研修会でフロンティア校としての取組について発表した。

(5) その他

- ・ 総合的な学習の時間の研究にも取り組み、指導計画をたて育てたい力を評価しながら計画的に実践している。
- ・ 1分間スピーチや短作文（3行日記など）などの日常的な取組で、次第に話すことや書くことに抵抗をもつ子どもが少なくなってきた。
- ・ 漢字や計算などの基礎的な学力の定着のために繰り返し学習などを工夫しながら実践している。
- ・ 職員朝礼を毎週水曜日は行わず、子どもとともに朝読書を実施することで、落ち着いて読書を行うようになった。また、朝読むための本を進んで借りて準備している子どもも増えてきた。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無

【特色ある取組事例としての紹介したいポイント（都道府県教育委員会記入）】

学習のねらいや児童の実態等に応じて、一斉指導、T T、習熟に応じた指導などを柔軟に取り入れ効果を上げている。